

『復讐かたきもち 鬼武作説話』
怪談ばいいたん

—— 解説・翻刻・影印 ——

服 部 仁

解 説

『復讐かたきもち 鬼武作説話』は、文化二年孟春序（文化二年春跋）、感和亭鬼武作、葛飾北周画という刊本である。本書

について、棚橋正博氏は『日本書誌学大系 48（3）黄表紙総覧 後篇』（平成元年十一月刊）の文化二年の項に、

◎ 『復讐かたきもち 鬼武作説話』
怪談ばいいたん

〔五巻・五冊・二十五丁 感和亭鬼武作 葛飾北周画〕 板元不明

〔備考〕該本及び該当するような絵題簽等未見。『増補年表』以下『小説年表』・『新修年表』・『書目年表』が
登載するのに倣いここへ掲げたが（『外題鑑』・『稗史提要』は未登載）、書名以下は『新修年表』と『書目年表』
に従った。これ等諸年表以外では水谷不倒氏が『草双紙と読本の研究』で挙げているとは云え、これも先行の
年表に依拠したものと考えられ、結局本書の内容に言及した資料のあることを聞かない。しかしながら、『大

『復讐かたきもち 鬼武作説話』 解説・翻刻・影印

惣蔵書目録と研究』の「大野屋惣兵衛蔵書目録 第三冊」の条に

敵討鬼武作物語 文化二丑年

同本 (百八十二部取合)

と見えるのが本書に該当しよう(現在所蔵先不明)。その「大惣蔵書目録」には本年板の他の鬼武作も全て記載されており重複するとは考え難い故、実際に刊行された書と考えてもよからう。蓋し、その書名は「大惣蔵書目録」に見える『敵討鬼武作物語』でもあったか。

としておられ、高木元氏も「感和亭鬼武者編述書目年表稿」(『江戸読本の研究——十九世紀の小説様式攷——』一九九五年十月刊、所収)の文化二年の項に、

(黄) (敵討鬼武作物語) 中五卷五冊 北周画 未見

* 『増補青本年表』など(『戯作者考補遺』『時江戸戯曲小説通史』『日本小説年表』『草双紙と讀本の研究』などの鬼武の条、著作一覽。)に載るが刊否未詳。

としておられる。博搜されたお二方が見ておられないのであるから、要するに稀本なのである。

しかし、凡作とは言わないまでも傑作ではない。ただし、いろいろな実験的な試みが行われる中本という書形の特徴ゆえか、はたまた端境期の本にありがちな適當さのせいか、黄表紙と読本という二つのジャンルの特徴を兼ね備えている。こういう、まことに曖昧な性格を持った造本がされていることが興味を引く。つまり、本文は黄表紙であるが、表紙、題簽、序、目録までと後序(跋)、広告は中本型読本なのである。外形から言えば、黄表紙では

なく中本型読本に分類したくなるし、黄表紙には分類したくない。

本書の内容については、自序に記してあるように、すべて鬼武の創作であるようだ。

本稿を記すにあたって、水田紀久氏、高橋圭一氏、山本 卓氏に御教示いただいた。感謝申し上げます。

書誌

編成…中本 一冊 十七・六×十二・五糎

表紙…幹色（七六七）、布目地

題 籤…左肩に子持杵の題籤（かなり剥落しているので大体の大きさ 十一・一×二・六糎）

「（復たきものあたり）
怪談 鬼武作説話」

見返…白紙

序 題…「（復たきものあたり）
怪談 鬼武作説話叙」

目録題…「（復たきものあたり）
怪談 鬼武作説話」

内題…なし

柱 刻…

尾 題…なし

「（復たきものあたり）
怪談 鬼武作説話」 解説・翻刻・影印

跋題…「おにたけさくものかたりかうじよ鬼武作説話後序」

丁数・序	一・五丁	目録	二丁	本文	十四・五丁（「ヨ九」と「十」の間に封じ紙あり）
後序	一・五丁	広告	〇・五丁	全	二十丁

凡例

- 一、漢字は、原則的に使用してある字体そのままとした。
- 二、カタカナについては、基本的にカタカナの意識をもって書かれたと思われるものをカタカナとしたが、「ハ」「ミ」については慣例に従ってそのまま残した。
- 三、各丁表、裏の最後に、〈十二オ〉とか〈二十二ウ〉というように丁数を示した。
- 四、会話等の画中詞は、見開き一丁分の地の文の後に、二字下げて記した。
- 五、本文の表記は、原則的に平仮名表記という黄表紙様式なので、適宜漢字を宛てて、一律に読点を施したものを、後ろに別に記した。
- 六、底本には架蔵本を用いた。

復讐（おにたけさくもの）がたりじよ
怪談
鬼武作説話叙 後素

然も風寒く霑霂雨降る夜。獨姥ヶ池の邊なる放れ家の燈下にあつて、倩作の趣向を案ずるに。折しも忽然と響出せる鐘の音を数れば。〈序一オ〉はや四更の物淋しく燈火消んとして且明りを増し。薄闇くなれる回くに一筋入ては机に靠れ二すじ足してハ搔立つ。終に百本ばかりの井を費す頃。悪寒身に染夜半の風噴鼻一ツか〈序一ウ〉作の種。正真正銘 虚実録復讐 怪談作説話の稗史一部と化るにこそ

感和亭

文化乙丑孟春 鬼武誌

〈序二オ〉

復讐（おにたけさくもの）がたり
怪談
鬼武作説話

目録

一 富樫重充逢天怪

附 崎野保利討變

〈序二ウ〉

てりは びやうしきの かう さいを めとる
照葉病死崎野娶後妻

附 照葉頭二亡 霊
てりは かほう れいあらハる

さきの かう さいゆう れいを とつ
崎野後妻捕二幽 霊

附 乳母并兒女暇 出
うば むすめいと まを いだす

な かむら さきの かう さいしじ やうを つうず
奈河村崎野後妻通二私 情

附 奈河村討二崎野

な かだ きく いを とる
中田見二奇 怪

附 中田妻物語
な かだ がつ まの かたり

さきの がせ かれ あたを ねらふ
崎野兒子覘レ仇

附 奈河村到二乳母 家
な かむら う ばの いへに いたる

一 崎野復警吊さきのふくしやうぶほ 父をと 母をむ

附 亡者成佛ちゆうじゃやうぶつ

一 崎野帰参家名相續さきのきさんかめいさうぞく

〈序三ウ〉

以上 目錄畢

〈ヨ九オ〉

そのかミ羽州のたいしゆ富樫とがし権のすけしげミつある夜さんじゆを相手にしゆゑんありてはやうし三つのころをひかハやにいたりたまハんとあるゆへ小せうかしら崎野磯いそ二郎といへるもの手しよくをとつてゑんかハつたいに先いたつおりしも秋のものすごきばかりにさへわたりけるが磯二郎ハはるかへだゝりひろゑんにひかへいるうちさつとふきくる風につれてともしびきゆれば替かへしよくもちきたらんとおんざしきへたちかへるあとにて富樫殿かハやをたちいでてうづばちのもとにたちより給ふ所にこつぜんと一人のめのわらハいできたりひしやくをとりてたいしゆの手にへヨ九ウへ封じ紙一枚アリそゞぐをふとミやり給ふに目なれざるものなればそのほうハたれの子なるぞやとたづねらるゝときかのわらハこたへもやらざりたいしゆのかんばせをミつめるありさまだいにもす

ごきがんしよくとなりたいしゆをめぐとびかゝるをりよぐわいなやつといゝさまこしなるたんとうひきぬきつきかけ給ふその手をとつてにハへひきおとす所へ磯二郎しよくたづさへてきたりしが何かハしらずあやしきものと殿のくみあい玉ふやうすなればてしよくなげすてかのくせものにむずとくむにかのせうにちからばつくんにてかたてをもつて殿をなげすて磯二郎がみつかつかんでちうにつり上るを手はやくわきさしぬいてひとかたなさしとふせバギヤツとさげびてひるむところをとつておさへあやしきものをくミとめたり出あいたまへとよバゝりける

〈十才〉

「ハテめなれぬものじやがたれの子なるぞ」〈ヨ九ウ〉

「イヤすいさんなるすりこぎおばけめ」

〈十才〉

このものおとをきくよりもきんじゆのめんくゝてしよくたづさへかけつけミればとのにハきせつのでい磯二郎ハあやしきものをくミしきあればまづとのをよびいけかいほうなすうちいそ二郎ハへんげをおもひのまゝにしとめてひといきほつとぞついたりける人くかのようくハいをうちより見るにつらハとらげの猫ねこに似にかたちハせうのにていなりしがしだひにとしふるねこのせうたいをあらハしけれバミなくおとろきこハふしぎのことかなさるにてもいそ二郎あらずんバ殿のおんミもあやうき所さきのがはたらき〈十ウ〉あつばれなりとせうびなしけれバ殿にもよるこバせ給ひとうぎのほうびとかのよりまさのてがらになぞらへおん刀をたまハリまたひさうありしこしもとてりはといへるびぢよをやどのつまにそくだされけるそもくこのへんけのとがしをうらみ申せしハきよねんとがしどのひさうありしからとりをとしふるのらねこきたりくるころしけるをいかり給ひそくぎにそのねをどうぎりにな

し給ひしがおもひまハせばこのねこハそのねこともうとにてとがしどのをかたきとらミしことにもあらんやと人
くしたをまいてぞおそれける

〈十一オ〉

ごろうじろいづれとんだものをやうくしとめのすかたしハしとゞめんのぶつききはおりだ

ギヤアくくギヤギヤンのギヤア(十ウ)

「磯二郎どのおてがらくそいつをひものにしてちんぶつちや屋へやりませう」

「からだよりあたまの大きなものだ」

「ふくすけばけものか〔手擦レデ難読〕」

〈十一オ〉

いそ二郎ハとのよりたまハリたる照葉（てんぱ）とふう婦中むつましくほどなくてりハなんしをうみおとしけるがさんごより
うちつゞき大びやうとなりけれバいりやうきねんも手をつくせどしるしなくいまハとなりてりはハおつとにむかい
いかなるふかきゑににてかこのとし月かくかたらひはべれどもめうとのゑんうすくきみのゆくへもミとゞけずお
んわかれ申ことのかなしさよわがなきあとにてもかたみのミづこをミづからとおぼされふびんをくハへたまハれか
しあらのこりおふやなごりおしやとばかりにて(十一ウ) つゐにはかなくなりけれバ磯二郎もひたんのなみだにく
れけるがせんかたなくとりおきなしかのうぶ子ハ母のびやうきゆへうまれだちよりうばをおき名を磯吉とよびて
りはがたみぞとてうあいあさからずそだてける

〈十二オ〉

「こちの人おさらバくばうもうばもさらバよく」

〔屏風ニ〕稲女画〔トノ署名アリ〕(十一ウ)

「このわこのことをかならずおあんじなされますなかなしやく」

「ハテせひもないことじや」

たれかいふ「作者が七五門にわかれるときこんなであつたらう」

〈十二オ〉

くハういんやのごとくはや磯二郎がたくにてハてりはが三くハいきもすみけれバどくしんにてはかないのせわもゆきとゞくまじと人々のすゝめにいなみがたくかうさいをよびむかへけるがこれもきりやうすぐれてうつくしかりしがこゝろたけくしくとかくおつとのるすにハマゝこいそ吉へのあたりもあしかりけれどもいそ二郎ハこゝろつかずうちすぎけるしかるにある夜磯二郎ハとまりばんにてにようぼううば磯吉とともにならびふして夜もしんかうにおよびしころなにやらまくらもにものおとあるにかうさいはめさめてうつゝのやうにこれを見ればいろしろなる女のかみうちミだれたるがうこんちりめんたちきのもやうつきたるこそてをちやくしほくとしたるすがたにて〈十二ウ〉たちたるさまなればかのかうさいハゆめ心にいぶかしくとおもひうばをよびおさんとふりむくうちかのものゝかたちはミへずなりけれバうばをおこし申やういまかやうくの女まくらもとにたてるとおぼへしがゆめにてありしやとねものがたりせしかバうばはおどろきふるへながらそれハすぎさり給ふおくさま世おはなしのかつかうといゝ又うこんちりめんたち木のもやうつきたるこそでハせんのおくさまごひさうゆへおてらへうちしきにをさめしがさてハ此子にまよひきたりたまひしにやと△〈十三オ〉▲いろあをさめてかたりけれどもかうさいハさのみおどろけるいろもなくていかでさることのあるやと何けなきふぜいにてありけるハさすがぶけのむすめかなとおもわれたり

〈十二ウ〉

「のうなつかしのわが子やのう」

「うばや／＼ちよつとおきてたも」〈十二ウ〉

うばねごとにいハく「アレサ福助どんよしなよおぼうさんがあぶなやおそめだハなグ、ワ／＼」〈十三オ〉

又いそ二郎とまりばんのおりからかうさいまだよひのまなりしがしそくたづさへせついにいりける時ひとふきの風きたつてせついの戸をあをりたてるひやうしにともしびきへてしんのやミとなりしところにせついのまどのそばとあかるくなるよとミゆれバいぜんまくらもとにたつたる女のかほまどよりさしのぞきかうさいをミてにこ／＼とわらひけるゆへさすがかうさいもぞつとミのけもよだちしがいつたいじやうぶの女なればはつたとにらめバあかりとともにきへうせける〈十三ウ〉さてもかうさいハリやうどのきくハいいぶかしくこのこと磯二郎にかたらんとおもひしがいや／＼さふらひのつまたるものせうこなきこといゝたておくびやうものとわらハれんもはづかしとおつともかぞくにもかたらずこゝろにひとしあんなしなにおもひけんある日わづか五才のいそ吉をすこしのことをさん／＼にのゝしりてうちやくなす

〈十四オ〉

「おまへハのちのおくさまかハ、／＼、けらく／＼」

「何ものなればふれいのふるまいりよぐハいであるうぞ」

作者曰「女のせついにいるところハどふもかまにくかるうがそこらハ画工衆たのミやすよい／＼」

〈十三ウ〉

「もし／＼おくさまもふ御かんにんあそバしませそれハあんまりでござります」

「何があまりじやそなたのそだてがわるいゆへこのようにぎようぎがわるうなつたのじや」

「あんまりなら此上こがたなはりのりようじだ」

〈十四オ〉

それよりほどへいそ二郎ふうふりんかへまねかれ夜ふけてうちつれだちわが家へたちかへる折からおつとハ小よ
うにとゞまり女ぼうさきにたちてかつて口の戸をひきあけし所におもひよらざるだいでころの大かまの上にかの先
さいなりといへる女のこよひいつにかかりてさもすさまじきがんしよくにて口ハミゝまでさけたるごとく一めん
に血にそみかねくろく〜とつけたるはをむきだしくろかみしほうへふりミだしてまなこを見ひらきうこんちりめん
立木のもやうの小そでをきながしかうさいをねめつけすつくと立たるありさまにはいかなるぶゆうの人たりともお
もてをむくべきやうもなくミへたるにぞかうさいもはつとおもひしが氣をとりなをし〈十四ウ〉とびかゝつてかの
ゆうれいにむつとくむくまれてゆうれいハにげいださんとする所をとつておさへるうちおつともかけいり何ことぞ
ともしびをもつてこれをみるにいぎやうにハ見ゆれどもミおぼへあるうばがむすめなればなにゆへにかゝるふる
まいなしたるやとあきれはてゝみへければかうさいハさてこそゆうれいのせうたいあらはれたりなにいこんあつて
これまでわれをおどさんとなしたるやさだめてどうるひあるべしありようにはくじやうせよとひしぎつけしじうの
やうすおつともものがたれバ磯二郎もはしめておどろきともにしさいをたづねける

〈十五オ〉

「一度ならず二どならずすいさんなるゆうれいどの」〈十四ウ〉

「わが子につらきむどくしんおもひしらせんあらうらめしやナア」

〈十五オ〉

そのときうばもおくよりはしりいでおたづねなふてもやうす申あけんこれまでわがむすめを先おくさまのにせゆう

れいとなしたるわけはだんなさまにハ御るすがちゆへ御ぞんじあらねどいまのおくさまとかくいそ吉さまへのあたりつらくおりくハうちたゝきなさるゝをうばのミにてハ口おしく先おくさまもさぞやくさばのかけよりもなさけなき人とをほすらんかゝるひどうのおんかたハ何とぞさきかたよりごりゑんねがハせもふさんいまのおくさまわがむすめを御ぞんしなきをさいわいにひそかにわがやへまいりむすめとしめしあハせおりくゝをどし〈十五ウ〉まいらすれどさらにおそるゝ御けしきもなきゆへにこよひハことにおそろしげによそおハせしもおそれりゑんもねがわれなんとさてこそかくハはからひ候也としじうをきいてかうさいハ大にいきりその女をはしめよりゆうれい也とことバをもつておどすやうす何にもせよこゝろへずとわざといそ吉につれなくあたりてうちやくなせしもこのせうたいをミあらハさんはかりことなりとことバをたくみにいゝくろめかゝるふとゞきの下女ハさうくおひ出したまハれとおつとにハわがミに利をつけうばおやこをあしさまにこそいゝなしけれ

〈十六オ〉

「サアにせゆうれいのせうたいをあらハしやく」

「どぶぞおゆるしあそばしませ」

ゆうれいに御ようしやとぢぐつたものよ〈十五ウ〉

「わけハもふしあげます先むすめハおはなし下さりませ」

「これハマアなんといつたらよかろう御用人へもとゞけずハなるまひだんぶつ」

〈十六オ〉

磯二郎ハしさいをきいてまづいつれともりひハわけかたけれどもさしあたり主人へうばがぶれいのふるまひそのまゝにもすておきかたしといとまをつかハし女ぼうのしんていも心よからぬものとおもひければこれよりうとくしく

なりあたりもつれなくミへけるゆへ女ぼうへいつたいひすかしきこんぜうにていんよくふかきものなればおつとがそりやくなるをうらみいけるがこゝに同じかちうの奈河村彦兵衛なかといへるりつばのさふらひおりく夜はなしなどに〈十六ウ〉きたりしゆへいつしかこれとしじやうをつうじひこべいもいハ木ならねバこのつまのゑんしよくにころまよひしだいにふかき中となるにつけてもたがひにあくしんつこの上ハおりをもつて磯二郎をなきものとしてたればゞからずめをとにならばやとしめしあハせそのおりをうかゞゐけるそふてきなる

〈十七オ〉

「かならずさとられ給ふなたがひにミの大じといふおてらさまだよ」〈十六ウ〉

「きづかひなさんなしおふせておめにかげよふ」

〈十七オ〉

しかるに磯二郎此頃ぐわいじやにおかされふしけれバこれさいわいと彦兵衛かのつまところをあハせいそ二郎疲れてねいりたるとき人しれずくびりころしびやうしのていにもてなさんと女ぼうにいふくめくすりをあたふるていにてまくらもとにたちよりほそおびをもつてしめころさんと磯二郎のねいきをかんがへそつとくびのしたへこしおびをまハしすでにくゝらんとするところにいそ二郎おりよく目をひらきこハなにすぞとがむれば〈十七ウ〉女ぼうもあらハるゝうへハせひなしとそまゝうへのりかゝりむたいにくびりころさんとなしけるゆへ磯二郎かたなとるまもあらざればさいさんなりとはねかへしおきあがらんとすれどもこのほどのびやうきにてこしたゝすぎようぶじゆうならざれば女ながらもごかくのせうぶくんづぼぐれつぎしきのうちをもみあいしハあやうしかりけるしだいなり

〈十八オ〉

「おまへをころしてひこべいさんとちんくちぎるハやりてへやのどびんときてあついわたしがしんちうサこ

まこといはずとかくごなさんせ」〈十七ウ〉

〔襖ニ「東汀書」トノ署名アリ〕

「しもはるまたきみとりこ山にたつ霞かな 幾路内子」〔襖〕

「につくひ女めくはんねんせよ」〈十八オ〉

されバ兩人ざしきのうちをくみあいながらあいのせうじをつきやぶりゑんがハへまろびいづるときゑんの上にまきわり一てうありければこれさいわいと磯二郎てつとりはやく女ぼうのかうべよりみけんをかけたゞ一うちに打けれバさすがの女もきうしよのいたでまつかうみぢんにうちくだかれギャツとばかりにいきたへしハこゝちよくこそミへたりけるかくとみるよりこかげにひかへし彦べいうしろにあらハれ磯二郎がかたさきより大げさにきりつくればむねんといふまもあらバこそむざんのさいごぞせひもなき此時磯吉はや十才なりしがかつてよりかけ来たりらうぜきものよとよバゝりながらわきざしぬいてきりかゝるをふミたおしてにげゆきける〈十八ウ〉さるほどに磯二郎ふう婦わうしなして彦兵衛のゆくへもしれざればバミなし子となりたる磯吉ハざいかたのうばが所へひきとり磯二郎いへだんぜつしてあきながやとなりければほどへて右の長やハ中田十蔵といへるさふらひにたまハリ引うつりぢうきよなしけるがある夜十蔵おなじやしきうちへ夜ばなしにゆきごをかこみありける所にはや夜半とおぼしきころそばニおきたる十蔵のわきさしおのづからつば元くつろぎ二三寸ぬけいでけれバ十ぞうふしぎ也と心におもひそつとさやにをさめもしわが家にへんじにてもあるやらんとごもそこゝになしたちかへりつまにむかいこよひ何こともあらざるやとたづねしかどかへることも候はずとこたへける、

〈十九オ〉

「七面二分のかなあじしんじやう申ぞ」

「ア、くるしやひひこさまたすけてくださんせ」〈十八ウ〉

「ハテこゝろへぬ」

「これハめう手じや笠庫の春川平のゝ平人ひらてじやかなハぬ」

〈十九オ〉

中田十ぞうハまた一両日へてかのたくへごうちにゆきこよいもよなかすぐるとおもふころさきの夜に同じくそバニをきたるわきさしの四五寸計りおのづとぬけいでればせんやといゝこよいといゝけうのふるまひこのやにしさいあるならんこよいハこゝにて夜を明しやうすをミとゞけんのごをかこみはやしのゝめとなれどもあやしきこともあらざればわがやにかへりつまにかハリしこともなきやとたづぬればやせんハあやしきことありとこたへぬるゆへいかなるわけとたづぬればつまの曰いつもをかへりおそきときハ下々をふさせわらハ一人はりしごとしてまぢまいらする所にうしミつのころつぎのふすまをあくるおとせしゆへおかへりにやとおもふ所にまたこのいまのふすまを〈十九ウ〉あけてきたるものをミレバさうしんちにそみかミふりミだしたるおそろしきさまの女子そろくまいたりしゆへ何ものぞとがめしにかのもの申やうわらハこの御たくにありし磯野いそ二郎がかうさいなるがミのふとゞきにおつとの手にかゝりたれとふらう人もなくしゆらのちまたにまよひ候へバナにとぞきみにねがひおきようの一ぶもよミてもらひ申さんとぞんずれども御あるじのゆうき又そばにさしおき玉ふめいけんのとくにおそれせんや十蔵どのおるすゆへたちいでんとぞんずる所へかへらせ給へばせんかたなくこよひハ御あるじかへらせ給へバこのこと君にねがわんとあらハれ候と申につきいかにもきゝとゞけたりおつとに○

〈二十オ〉

「のう〜おねがひあつてまいりしものさなさけなふの給ひそよ」〈十九ウ〉

「女と思ひあななどとあてがちがうぞこりのたぐひかせうたいをあらわしや」

〈二十オ〉

○かたりあとねぎごろにとい參らせんと申所へまた一人のおとここれもさうしんちにそみかみふりみだしたるがこつぜんとあらはれいかれるかんバせにてかの女のたぶさつかんでにじりつけそれがしハこのものゝおつと磯の磯二郎也十ぞうどのハこんいにいたし候が国とかまくらとへだゝるゆへそのもとははしめてたいめん候しかるに此女のおく心ゆへやミ〜なか村彦衛の手にかゝりむねんのさいごをとげたればこのうつふんをさんぜんとしゆらのちまたにさまよへバこの女めにもとにくつうをミせんずとつきまとうてくるしめ候へばかならずとふらひのことハゆるし給ハるべし此上ハせがれがかけミにつきそひてかたきをうたせ 〈二十ウ〉しゆらのもうしうはらすべしきたれやきたれとかの女をちうにひつたてゆくよとミへしがそのまゝかたちハミへずなり候とかたるをきいて十蔵もきいのおもひをなしさるにてもそのほうよくもやうすをミとゞけたり磯二郎が心ていもふびんなればかのせうにのちからとなりかたきをうたせきさんをねがひ磯野がまよいをはらしゑさせんとおもひたつこそたのもしけれ

〈二十一オ〉

「テモおそろしいしうねんじやナア」〈二十ウ〉

「なをもくろうをミスべきぞわがゆくかたへきたれ〜」

「ゆるさせ玉へ磯二郎どの」

「こんなおそろしい所でハ作者もむだのかきいれもできずたゞうつむいてなんにもいはずだ」 〈二十一オ〉

なかむら彦兵衛ハ磯二郎をうつてくにを立のきくハいこくのていにさまをかへそこゝとさまよいしがはや両三ねんもうちすぎて何とやらこきよのかたゆかしく又く国のかたへたちかへりじやうかちかきざいしよに一夜のやどをむしんなせしが此いへハかのいそ二郎がうバのたくにて磯吉をやしなひおき十三才にもなりけれバ父のかたき彦兵衛のゆくへをたづねんと心かけたるおりから中田十蔵もせんこく此家ニたづね来りかたきを討てちゝのもうしう〈二十一ウ〉はらせよとすゝめいたる所へ宿のむしんにきたりししゆぎようじやをミレバかたき彦べいゆへ磯吉ハ大によるこびせうねんながらもいまましくちゝのかたきとなのりかけきつてかゝれバ彦兵衛もせんかたなくしやくじようにしこミし刀ぬきあハせかへりうちぞとあしらふうちふしぎなるかな磯二郎がすがた彦べいがまへにすつくとたちいかに彦兵衛そのほうをせがれにうちとらせんとわがれいこんのつきまといこれまでおびきよせられたれバもはやかなわじくハんねんせよとねめつけられさしものひこべい△

〈二十二オ〉

「ゆきくらししたしゆぎようじや一夜のやどり御ほうしあれ」

「おやのかたきなかむらひこべいじんじやうにせうぶく」〈二十一ウ〉

「こしやくなすでつちめかへりうちだぞ」

「うしろにハ十ぞうがひかへておるぞおくせずせうぶく」

〈二十二オ〉

△まなこくらんで気おくれしたぢろく所をいそ吉すかさずとびかゝつてきりつくれば小うでなれどもねんりきのいハをもとふすやひバのきれあぢかたさきよりちの下まで一刀に切さぐれバうんとにつけにたふるゝをたゝみかけてきりふせくくびかききつてたちあがれば十ぞうハあふぎをひらきうバもろとにてがらくとあふぎたつるにぞい

そ二郎がれいこんハさもうれしげにうちハラひかたちハそのまうせにける（二十二ウ）いそ吉ちゝのかたきをうちとりければとがしどの御せうびあさからずめしかへされてちゝのあとめさうぞく申つけられければこのよろこびに中田十蔵もろとも父母かうさいまでのなき跡をねんごろにとふらひければいそうのとくによりミのつミとがもきへうせていまぞぶつくハをゑたるぞやといふこへともにいそ二郎かうさいのかたちかげのごとくにあらハれいであがつしやうなしてありければミなくかんるいきもにこたへなをねんくハいのとふらいもおこたりなくぞつとめける

（二十三オ）

「できた〜」

「うらみのやいばおもひしつたか〜」

「ゆうれいめのおかげでこびつちよのてにかゝるかエ、ざんねん〜しつたか〜とやかましいすかねへぞよ
うア、くるしい〜」

「ア、ううれしやいまこそぶつくハをゑるならん」（二十二ウ）

「あらありかたや」

「なむあミだぶつ〜」

（二十三オ）

さきの磯吉ハちゝのかめいさうぞくなしげんぶくして名も磯二郎とあらためてたき春をぞむかへける

作者曰 此本ハむだ口などかきいれべき所もなくまことのまじめに御ざ候間おかしミのうすき所ハ御かんにん可被

下候

おにたけ

お子さまかたへ

此本ハむたをかきいれにくいもつともだがそれでもちつとハ書入てめでたいく

鬼武作

北周画

〈二十三ウ〉

鬼武作説話後序

夫戯作は則 怪物也案によつて面白狸の腹ポンあり且大咲チヤンく坊あり硯の海も智恵の海も海と〈二十四オ〉
いふ字ハ替らねど深ひと浅ひは上手と下手閩人がなけれバ書肆は闇やミちみつちやの此作者が筆の先を一寸とあ
てたる十五丁ハ〈二十四ウ〉黒朦から牽出す丑の新版稗史悪ひ處も善やうに御評判御一覧のほど作者画工板元一同
偏に願ひ上る而已

きのとのうしはる日

〈二十五オ〉

来春出版目次

春袋	鞆釣	形	袋入全二冊	鬼武作
天保	太平	記	袋入全二冊	同作

各いづれもおかしみ第一の作_レ御坐候此外_レ玆_レ敷新板追々差出申候御一覽奉希候

板元

〈二十五ウ〉

そのかみ、羽州の太守富樫権介重充、ある夜、近習を相手に酒宴ありて、はや丑三つのころをひ、厠に至り給はん
とあるゆへ、小姓頭崎野磯二郎といへる者、手燭を取つて、縁側つたいに先に立つ、折しも、秋の最中の月、もの
すぎきばかりに冴え渡りけるが、磯二郎は、はるか隔たり、広縁に控えているうち、さつと吹きくる風につれて灯消
ゆれば、替燭^{かへ}持ち来たらんと、御座敷へ立ち返る、後にて富樫殿、厠を立ちいで、手水鉢の下に立ち寄り給ふ所に、
忽然と一人の女の童いで来り、柄杓を取りて太守の手に〈ヨ九ウ〉注ぐを、ふと見やり給ふに、目なれざる者なれ
ば、「その方は誰の子なるぞや」と尋ねらるゝ時、かの童答へもやらず、太守の顔^{かほ}を見つめる有様、次第に物凄き
顔色となり、太守を目掛け飛び掛かるを、「慮外ナ奴」と言いさま、腰なる短刀引き抜き、突き掛け給ふ、その手
を取つて庭へ引き落とす所へ、磯二郎、燭携へて来りしが、何かは知らず、怪しき者と殿の組み合い玉ふ様子なれ
ば、燭投げ捨て、かの曲者にむざと組むに、かの小児、力抜群にて、片手をもつて殿を投げ捨て、磯二郎が髪束^{かみづか}
かんで宙に吊り上げるを、手早く脇差抜いて一刀刺し通せば、「ギャツ」と叫びてひるむところを、取つて押さへ、
「怪しき者を組み止めたり、出会い給へ」と呼ばりける、

「ハテ目なれぬ者じやが、誰の子なるぞ」〈ヨ九ウ〉

「イヤ推参なるすりこぎおばけめ」

〈十オ〉

この物音を聞くよりも、近習の面々、手燭携へ駆け付け見れば、殿には気絶の体、磯二郎は怪しき者を組み敷きあれば、まづ殿を呼び活け、介抱なすうち、磯二郎は変化を思ひのまゝに仕留めて、一息ほつとぞついたりける、人々かの妖怪をうち寄り見るに、面は虎毛の猫に似て、形は小児の体なりしが、次第に年経る猫の正体を現しければ、皆々驚き、「こは不思議のことかな、さるにても磯二郎あらずんば、殿の御身も危うき所、崎野が働き〈十ウ〉天晴なり」と賞美なしければ、殿にも喜ばせ給ひ、当座の褒美と、かの頼政の手柄になぞらへ御刀を賜り、また秘蔵ありし腰元照葉と言へる美女を宿の妻にそ下されける、そもこの変化の富樫を恨み申せしは、去年、富樫殿秘蔵ありし唐鳥を、年経る野良猫来り、食み殺しけるを、怒り給ひ、即座にその猫を胴斬りになし給ひしが、思ひ回せば、この猫はその猫と夫婦にて、富樫殿を敵と恨みしことにもあらんやと、人々舌を巻いてぞ恐れける

〈十一オ〉

「ごろうじろ、いづれとんだものを、やうく仕留めの姿しばしとゞめんの、ぶつさき羽織だ」

「ギヤア／＼／＼ギヤギヤンのギヤア」〈十ウ〉

「磯二郎どの御手柄／＼、そいつを干物にして珍物茶屋へやりませう」

「体より頭の大きなものだ」

「福助化け物か」

〈十一オ〉

磯二郎は殿より賜りたる照葉と夫婦中むつまじく、ほどなく照葉、男子を産み落としかけるが、産後より、うち続き大病となりければ、医療・祈念も手を尽くせど、験なく、今際となり、照葉は夫に向かい、「いかなる深き縁にて

か、この年月、かく語らひ侍れども、夫婦の縁薄く、君の行方も見届けず、御別れ申すことの悲しさよ、我が亡き後にも、形見の水子を自らとおぼされ、不憫を加へ給はれかし、あら残り負ふや、名残惜しや」とばかりにて、
〈十一ウ〉遂にはなくなりければ、磯二郎も悲嘆の涙にくれけるが、詮方なく取り置きなし、かの産子は母の病
氣故、生れだちより乳母をおき、名を磯吉と呼びて、「照葉が形見ぞ」と、寵愛浅からず、育てける、〈十二オ〉

「こちの人おさらばく、坊も乳母もさらばよく」〈十一ウ〉

「この和子のことを、必ずお案じなされますな、悲しやく」

「ハテ是非もないことじや」

誰か言ふ「作者が七糸門に別れる時、こんなであつたらう」

〈十二オ〉

光陰矢の如く、はや磯二郎が宅にては、照葉が三回忌も済みければ、「独身にては、家内の世話もゆき届くまじ」と、人々の勧めに否みがたく、後妻を呼び迎へけるが、これも器量優れて美しかりしが、心猛々しく、とかく夫の留守には継子磯吉への当たりも悪しかりけれども、磯二郎は心付かず、うち過ぎける、しかるにある夜、磯二郎は泊番にて、女房・乳母・磯吉と共に並び伏して、夜も深更に及びし頃、何やら枕元に物音あるに、後妻は目覚めてうつつの様にこれを見れば、色白なる女の髪うち乱れたるが、鬱金縮緬に立木の模様つきたる小袖を着し、しほくとしたる姿にて〈十二ウ〉立ちたる様なれば、かの後妻は夢心に「訝し」と思ひ、乳母を呼び起こさんと振り向くうち、かの物の形は見へずなりければ、乳母を起こし申やう、「今、簡様々々の女、枕元に立てると覚へしが、夢にてありしや」と、寝物語せしかば、乳母は驚き震へながら、「それは、過ぎ去り給ふ奥様也、お話の格好とい、

又鬱金縮緬に立木の模様つきたる小袖は、先の奥様、御秘蔵故、お寺へ打敷きに納めしが、さては此子に迷ひ来り給ひしにや」と、〈十三オ〉色、青ざめて語りけれども、後妻は、さのみ驚ける色もなく、
「いかで、さることのあるや」と、何気なき風情にてありけるは、「さすが武家の娘かな」と思われたり、
〈十二ウ〉

「のう、懐かしの我が子やのう」

「乳母や〜、ちよつと起きてたも」 〈十二ウ〉

乳母、寢言に曰く「アレサ福助どん、よしなよお坊さんがあぶなや、おそめだはな、グ、ワ〜」 〈十三オ〉
又、磯二郎泊番の折から、後妻、まだ宵の間なりしが、紙燭携へ、雪隠に入りける時、一吹き風来つて、雪隠の戸を煽り立てる拍子に灯消へて、真の闇となりしところに、雪隠の窓の外、ばつと明るくなるよと見ゆれば、以前枕元に立つたる女の顔、窓よりさし覗き、後妻を見て、にこ〜と笑ひける故、さすがの後妻もぞつと身の毛もよだちしが、いつたい丈夫の女なれば、はつたと睨めば、明りと共に消へ失せける、〈十三ウ〉
さても後妻は、両度の奇怪訝しく、このこと磯二郎に語らんと思ひしが、「いや〜侍の妻たる者、証拠なきこと言々たて、臆病者と笑はれんも恥づかし」と、夫にも家族にも語らず、心に一思案なし、何思ひけん、ある日、わづか五才の磯吉を少しのことを散々に罵り打擲なす
〈十四オ〉

「お前は後の奥様か、ハ、ハ、ハ、ハ、けら〜〜〜」

「何者なれば無礼の振舞い、慮外であろうぞ」

作者曰「女の雪隠にいるところは、どふも描きにくかるうが、そこらは画工衆頼みやす、よい〜」 〈十三ウ〉

「もしく、奥様、もふ御堪忍あそばしませ、それはあんまりでござります」

「何があまりじや、そなたの育てが悪い故、このように行儀が悪うなつたのじや」

「あんまりなら、此上、小刀、鍼の療治だ」

〈十四オ〉

それよりほど経て、磯二郎夫婦、隣家へ招かれ、夜更けてうち連れ立ち我が家へ立ち帰る折から、夫は小用にとゞまり、女房、先に立ちて勝手口の戸を引き開けし所に、思ひよらざる台所の大釜の上に、かの先妻なりといへる女の、今宵はいつに變はりて、さも凄まじき顔色にて、口は耳まで裂けたることく一面に血に染み、鉄漿黒々と着けたる齒を剥きだし、黒髪四方へ振り乱して、眼を見開き、鬱金縮緬立木の模様的小袖を着流し、後妻をねめつけ、すつくと立たる有様には、いかなる武勇の人たりとも、面を向くべきやうもなく見へたるにぞ、後妻もはつと思ひしが、氣を取り直し、〈十四ウ〉飛び掛かつて、かの幽霊にむづと組む、組まれて幽霊は逃げ出ださんとする所を、取つて押さへるうち、夫も駆け入り、「何ごとぞ」と、灯をもつてこれを見るに、異形には見ゆれども、見覚へある乳母が娘なれば、「何故にかゝる振舞いなしたるや」と、呆れ果てゝ見へければ、後妻は、「さてこそ、幽霊の正体現れたり、何、遺恨あつて、これまで我を脅さんとなしたるや、定めて同類あるべし、有り様に白状せよ」と、拉ぎつけ、始終の様子、夫にも物語れば、磯二郎も初めて驚き、共に子細を尋ねける、

〈十五オ〉

「一度ならず、二度ならず、推参なる幽霊殿」〈十四ウ〉

「我が子に辛き無得心、思ひ知らせん、あらうらめしや、ナア」

〈十五オ〉

その時、乳母も奥より走りいで、「お尋ねなふても、様子申上ん、これまで我が娘を、先奥様の偽幽霊となしたる

訳は、旦那様には御留守がち故、御存じあらねど、今の奥様、とかく磯吉様へのあたりつらく、折々はうち叩きな
さるゝを、乳母の身にては口惜しく、先奥様も、さぞや草葉の蔭よりも、情けなき人とをばすらん、かゝる非道の
御方は、何とぞ先方より御離縁願はせ申さん、今の奥様、我が娘を御存じなきを幸いに、密かに我が家へ参り、娘
と示し合はせ、折々脅しへ十五ウ参らすれど、さらに恐るゝ御気色もなき故に、今宵はことに恐ろしげに装はせ
しも、恐れて離縁も願われなんと、さてこそかくは計らひ候也」と、始終を聞いて、後妻は大に怒り、「その女を、
初めより幽霊也と、言葉をもつて脅す様子、何にもせよ心得ずと、わざと磯吉につれなくあたり打擲なせしも、こ
の正体を見現さん計りごとなり」と、言葉を巧みに言いくろめ、「かゝる不届きの下女は、早々追ひ出し給はれ」
と、夫には我が身に利を付け、乳母親子を悪し様にこそ言いなしかれ

「サア、偽幽霊の正体を現しや〜」

「どふぞお許しあそばしませ」

幽霊に御容赦とぢぐつへ地口 たものよへ十五ウ

「訳は申し上げます、先、娘はお放下さりませ」

「これはマア、何と言つたらよかろう、御用人へも届けずばなるまひ、だんぶつ」

〈十六オ〉

磯二郎は子細を聞いて、まづ、いづれとも理非は分けがたけれども、さしあたり主人へ乳母が無礼の振舞ひ、その
まゝにも捨て置きがたとしと、暇を遣はし、女房の心底も心良からぬものと思ひければ、これより疎々しくなり、あ
たりもつれなく見へける故、女房は、一体ひすかしき根性にて、淫欲深き者なれば、夫が粗略なるを恨みいけるが、

こゝに同じ家中の奈河村彦兵衛と言へる立派の侍、折々、夜咄などに〈十六ウ〉来たりし故、いつしかこれと私情を通じ、彦兵衛も岩木ならねば、この妻の艶色に心迷ひ、次第に深き中となるにつけても、互ひに悪心募り、この上は折をもつて磯二郎を亡き者として、誰憚らず夫婦にならばやと示し合はせ、その折を窺るるぞ不敵なる

〈十七オ〉

「必ず覺られ給ふな、互ひに身の大じと言ふお寺様だよ」〈十六ウ〉

「氣遣ひなさんな、しおふせて御目にかげよふ」

〈十七オ〉

しかるに磯二郎、此頃、外邪に冒され伏しければ、これ幸いと、彦兵衛、かの妻と心を合はせ、磯二郎疲れて寝入りたる時、人知れず括り殺し、病死の体にもてなさんと、女房に言い含め、葉を与ふる体にて枕元に立ち寄り、細帯をもつて絞め殺さんと、磯二郎の寢息を考へ、そつと首の下へ腰帯を回し、既に括らんとするところに、磯二郎折よく目を開き、「こは何するぞ」と、咎むれば、〈十七ウ〉女房も「頭はるゝ上は是非なし」と、そのまゝ上に乗りかゝり、無体に括り殺さんとなしける故、磯二郎、刀取る間もあらざれば、「推參なり」と跳ね返し、起き上がりんとすれども、このほどの病氣にて腰立たず、行歩自由ならざれば、女ながらも互角の勝負、くんづほぐれつ座敷の内を揉み合ひしは、危うしかりける次第なり、

〈十八オ〉

「お前を殺して彦兵衛さんと、ちんくちぎるは遣手部屋の土瓶ときて熱いわたしが心中サ、こまこと言はずと、覚悟なさんせ」〈十七ウ〉

〔襖ニ「東汀書」トノ署名アリ〕

「しもはるまたき みとりこ山に たつ霞かな 幾路内子」〔襖〕

「につくひ女め、観念せよ」〔十八オ〕

されば兩人、座敷の内を組み合いながら、間の障子を突き破り、縁側へまろび出づる時、縁の上に薪割り一丁ありければ、これ幸いと磯二郎、手つ取り早く女房の頭より眉間をかけ、たゞ一打ちに打ければ、さすがの女も急所の痛手、真つ向う微塵に打ち砕かれ、「ギャツ」とばかりに息絶へしは、心地好くこそ見へたりける、かくと見るより木陰に控へし彦兵衛、後ろに現れ、磯二郎が肩先より大袈裟に斬り着くれば、「無念」と言ふ間もあらばこそ、無惨の最期ぞ是非もなき、此時、磯吉はや十才なりしが、勝手より駆け来たり、「狼藉者よ」と呼ばゝりながら、脇差抜いて斬りかゝるを、踏み倒して逃げ行きける、〔十八ウ〕さるほどに、磯二郎夫婦横死なして、彦兵衛の行方も知れざれば、孤子となりたる磯吉は、在方の乳母が所へ引取り、磯二郎家断絶して空き長屋となりければ、程経て、右の長屋は中田十蔵と言へる侍に賜り、引移り、住居なしけるが、ある夜、十蔵同じ屋敷内へ夜啼に行き、碁を囲みあける所に、はや夜半とおぼしき頃、側に置きたる十蔵の脇差、自づから鰐元寛ぎ、二三寸抜け出でければ、十蔵「不思議也」と心に思ひ、そつと鞘に納め、「もし我が家に変事にもあるやらん」と、碁もそこくになし、立ち返り、妻に向かい、「今宵、何事もあらざるや」と尋ねしかど、「変はることも候はず」と答へける、

〔十九オ〕

「七両二分の金味、進上申ぞ」

「ア、苦しや、彦様、助けて下さんせ」〔十八ウ〕

「ハテ、心得ぬ」

「これは妙手じや、笠庫の春川、平野の平人、平手じや適はぬ」

〈十九オ〉

中田十蔵は、また一兩日経て、かの宅へ碁打ちに行き、今宵も夜中過ぐると思ふ頃、先の夜に同じく、側に置きたる脇差の、四五寸計り自づと抜け出でければ、先夜といふ今宵といふ稀有の振舞ひ、この家に子細あるならん、今宵はこゝにて夜を明し、様子を見届けんと、碁を囲み、はや東雲となれども怪しきこともあらざれば、我が家に帰り、妻に「変はりしこともなきや」と尋ねれば、「夜前は怪しきことあり」と答へぬる故、「如何なる訳」と尋ねれば、妻の曰「いつも御帰りに遅き時は、下々を臥させ、妾一人針仕事して待ち参らする所に、丑三つの頃、次の襖を開くる音せし故、御帰りにやと思ふ所に、またこの居間の襖を〈十九ウ〉開けて来たるものを見れば、総身血に染み、髪振り乱したる恐ろしきさまの女子、そろく参りし故、何者ぞと咎めしに、かのもの申やう、『妾は、この御宅にありし磯野磯二郎が後妻なるが、身の不届きに夫の手にかゝり、誰申う人もなく修羅の巷に迷ひ候へば、何卒、君に願ひ、御経の一部も読みてもらひ申さんと存ずれども、御主の勇氣、又側に差し置き玉ふ名劍の徳に恐れ、先夜、十蔵殿お留守故、立ち出でんと存ずる所へ帰らせ給へば、せんかたなく、今宵は御主婦らせ給ねば、このこと君に願わんと現れ候』と申につき、いかにも聞き届けたり、夫に○

〈二十オ〉

「のうく御願ひあつて参りし者さ、情けなふの給ひそよ」

〈十九ウ〉

「女と思ひ侮ると、あてが違うぞ、狐狸の類ひか正体を現しや」

〈二十オ〉

○語り、跡懇ろに弔い参らせんと申所へ、また一人の男、これも総身血に染み、髪振り乱したるが、忽然と現れ、

怒れる顔かんばせにて、かの女の髻挿んでにじりつけ、『それがしはこの者の夫磯野磯二郎也、十蔵殿は懇意に致し候が、国と鎌倉と隔たる故、そのもとは初めて対面候、しかるに此女の悪心故、やミく奈河村彦兵衛の手にかゝり、無念の最期を遂げたれば、この鬱憤を散せんと、修羅の巷にさまよへば、この女めにも共に苦痛を見せんずと、つきまとうて苦しめ候へば、必ず申ひのことは許し給はるべし、此上は倅が陰、身に付き添ひて敵を討たせ、〈二十ウ〉修羅の妄執晴らすべし、来れや来れ』と、かの女を宙に引つ立てゆくよと見へしが、そのまゝ形は見へずなり候』と語るを聞いて、十蔵も奇異の思ひをなし、「さるにてもその方、よくも様子を見届けたり、磯二郎が心底も不憫なれば、かの小児の力となり、敵を討たせ帰参を願ひ、磯野が迷いを晴らし得させん」と、思ひ立つこそ頼もしけれ

「テモ恐ろしい執念じやナア」 〈二十ウ〉

「なをも苦勞を見すべきぞ、我が行く方へ来れく」

「許させ玉へ磯二郎殿」

「こんな恐ろしい所では、作者も無駄の書き入れもできず、たゞうつむいて何にも言はずだ」 〈二十一オ〉
奈河村彦兵衛は、磯二郎を討て国を立退き、廻国の体に変へ、そこゝとさまよひしが、はや両三年もうち過ぎ、何とやら故郷の方ゆかしく、又く国の方へ立ち返り、城下近き在所に一夜の宿を無心なせしが、此家ほかの磯二郎が乳母の宅にて、磯吉を養ひおき、十三才にもなりければ、父の敵、彦兵衛の行方を尋ねんと心掛けたる折から、中田十蔵も先刻此家に訪ね来り、「敵を討て父の妄執 〈二十一ウ〉晴らせよ」と勧めいたる所へ、宿の

無心に來たりし修行者を見れば、敵彦兵衛故、磯吉は大に喜び、少年ながらも勇ましく、「父の敵」と名乗りかけ、斬つてかゝれば、彦兵衛も詮かたなく、錫杖に仕込みし刀抜き合はせ、「返り討ちぞ」とあしらふうち、不思議なるかな、磯二郎が姿、彦兵衛が前にすつくと立ち、「いかに彦兵衛、その方を倅に討ち取らせんと、我が靈魂のつきまとい、これまでおびき寄せたれば、もはや叶わじ観念せよ」とねめつけられ、さしもの彦兵衛△〈二十三才〉

「行き暮らした修行者、一夜の宿り、御奉仕あれ」

「親の敵、奈河村彦兵衛、尋常に勝負々々」△〈二十一ウ〉

「小癩な、すでつちめ、返り討ちだぞ」

△〈二十二オ〉

△眼眩んで氣後れし、たぢろく所を、磯吉すかさず飛び掛かつて斬りつければ、小腕なれども念力の巖も通す刃の切味、肩先より乳の下まで一刀に切下ぐれば、うんとおつけに倒るゝを、たゞみかけて斬り伏せく、首掻き斬つて立ち上がれば、十歳は扇を開き、乳母諸共に、手柄々々とあふぎたつるにぞ、磯二郎が靈魂は、さも嬉し気にうち笑ひ、形はそのまゝ失せにける、△〈二十二ウ〉磯吉、父の敵を討ち取りければ、富樫殿御賞美浅からず、召し返されて、父の跡目相続申付けられければ、この喜びに、中田十歳諸共、父母後妻までの亡き跡を、懇ろに弔ひければ、「名僧の徳により、身の罪科も消へ失せて、今ぞ仏果を得たるぞや」と言ふ声共に、磯二郎・後妻の形、影のごとくに現れ出で、合掌なしてありければ、皆々感涙、肝にこたへ、なを年回の弔いも怠りなくぞ勤めける、

△〈二十三オ〉

「できた〜」

「恨みの刃、思ひ知つたか〜」

「幽霊めのおかげで、こびつちよの手にかゝるか、エ、残念々々。しつたか〜とやかましい、すかねへぞよ
う、ア、苦しい〜」

「ア、嬉しや、今こそ仏果を得るならん」 〈二十二ウ〉

「あら有難や」

「南無阿弥陀仏〜」

〈二十三オ〉

先の磯吉は、父の家名相続なし、元服して名も磯二郎と改め、めでたき春をぞ迎へける、作者曰 此本は無駄口な
ど書き入れべき所もなく、まことの真面目に御座候間、おかしみの薄き所は御堪忍可被下候 鬼武

お子様方へ

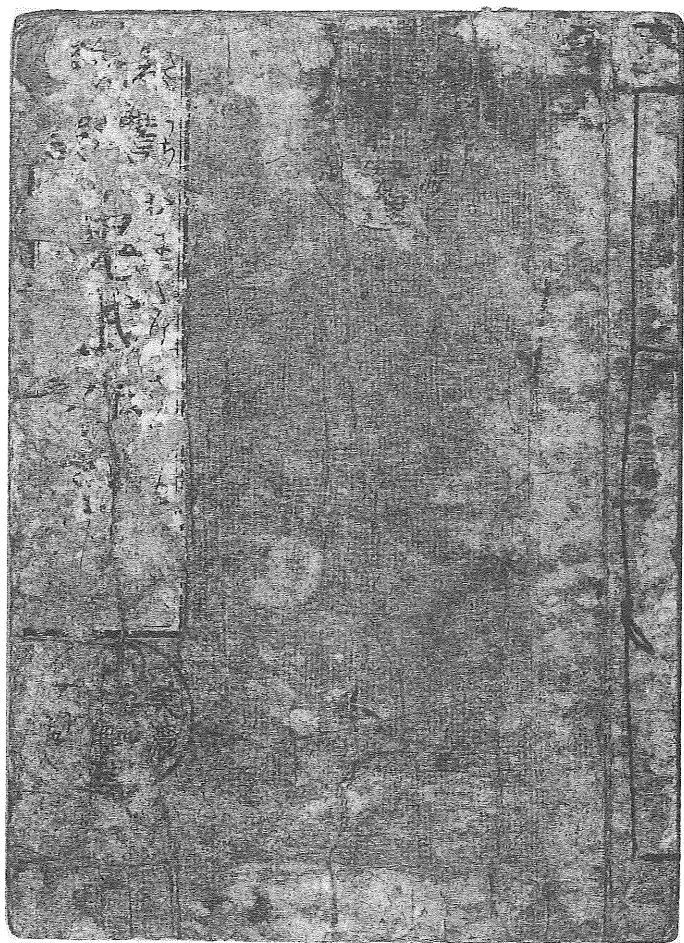
此本は、無駄を書き入れにくいも尤もだが、それでもちつとは書入てめでたい〜

鬼武作

北周画

〈二十三ウ〉

『復讐怪談』
鬼武作説話』
解説・翻刻・影印



<表紙>



『怪談鬼武おたけきもの作説話』

解説・翻刻・影印

三四

<表紙見返し>

怪言 雙

鬼武作説話叙



大猷 伊勢

此風をくまらば 果ては 命を失ふ

獨姥 池に 遺る 福の 池に

あつて 情作乃 執向 我輩 必 新

忽然と 御書 出せる 謹此 書を 授け

『怪談』 鬼武作説話』 解説・翻刻・影印

土や四文のお津あまぎくともよ燈方あまぎ波なみんなみと
 一おき一おき旦あけ明あけりをま増まし。是これ園うゑく
 ちちままささるる。回まわりり一ひと筋はだ入いるるをを机つくひ
 靠かかれれ二ふたまま一ひと足あしくく六む指さをを引ひく。
 種ついで小こ中ちゆう本ほんををののちちにに種こ芥かいをを費つひひひ
 ちちとと身みをを深こほ夜よ半はんのの風かぜ噴く鼻はな一ひとつつ
 西にし窓まどをを身みをを深こほ夜よ半はんのの風かぜ噴く鼻はな一ひとつつ

此種正法虚実流傳
 怪説作説話乃稗史一部也
 化多山等

子化七五
 感水亭
 鬼武



復讐くつきり
怪談くわいたん

鬼武作説話おにぶさくさうわのげんご

目録

一 富樫重亮達天怪とがし ちゆうりやう とうてんかい

附 山野保利討変化やまの へり とし げんげ

一 思葉病死崎野娘後妻
（りえいびやしきまきのくろしんをめでし）
 附 思葉不斃亡靈
（りえいふがくおらあふら）
 一 碓聖後妻捕幽霊
（さきののぶくろしんやうあをまらぶ）
 附 乳母并兒女腹出
（うぶむねとわらわこむすこ）
 一 赤河村崎野後妻通私情
（あかがむらさきのかきろしんあはれまをうとく）
 附 赤河村討崎野
（あかがむらさきのをうり）

一 中田見奇怪
ちゅうだけんきくわい

附 中田妻初諾
ちゅうだつまいしつだ

一 崎野児子規仇
さきのがせごれいし

附 素河村到家母家
すくむらにのりかへ

一 崎野復讐弔父母
さきののくわいしつちゆうぶちゆう

附 亡者成佛
むしやうぶつ

『妖怪談鬼武作説話』解説・翻刻・影印

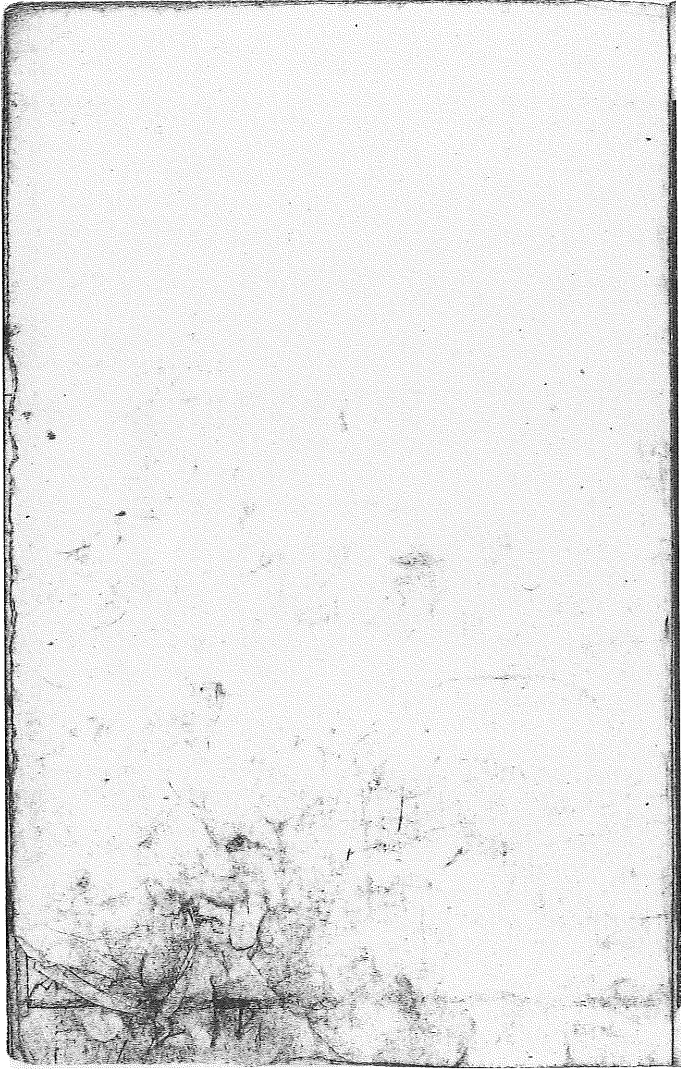
一 崎野帰系家名相續さきのきさんりめいさうぞく

又上 目錄畢



<ヨ九ウ>

『復讐』
鬼武作説話』
解説・翻刻・影印



<封じ紙>

『鬼武作説話』
鬼武作説話
解説・翻刻・影印



<封じ紙>







<十一才>







<十二ウ>

『源
談』

おたけさのものがたり

鬼武作説話 解説・翻刻・影印



<十三オ>



<十三ウ>



<十四才>





<十五才>



<十五ウ>



<十六才>



<十六ウ>



<十七オ>



まうに候下り
 今ややおおきれ
 中りれこれこれ
 足もとまきまの
 つねとくちとせ
 いそ下つれ
 ねりるに人
 まあはぐり
 びやしのてんまわ
 ちきんとせがま
 りとめまを
 あいあるてんま
 おまふかまな
 ようこそおびを
 かつくま

こらさんと候
 ぬきとくちとせ
 まあおびとま
 くらんとま
 せ下りて目とひ
 にかまきま

の
 中
 ま
 樹

人
 象

おまを
 ちきん
 まあ
 こま
 りとめ
 まあ



<十八才>



まるほど破下す物也此處てまゝ其のゆるもれ
 おればと申の一子とありける破言はかりこのゆるもれ
 ひねとり破えりたかか所てあは
 ちがやとけりんれおけりて有り
 必やハ甘田十郎ととまきやひよ
 へりりしうつりぢらきまきまきまの
 才あつおほじや一はち入夜を直すおほじと
 りとけありりおまてやあやとおちりたまら
 る言おれと申すまれの日記さ一あつらとておえ
 くらあつ三まけのりぬがすがらあまんとん子
 ありけそつとまや子
 まめめかしてまゐる
 けもあやんとてい
 そくおちりてあは
 つあまむれにあはけ
 こもあまむれに
 けりてとていりる

一はちあつらとて
 ままの春川手
 手入ひとてとて
 やらまらぬ

<十九オ>



<十九ウ>



<二十才>



<二十ウ>



あやふかじらうま下
 きんねまきふれと花女とちりま
 ひつてゆくおとこ三丁その
 うちいふやありいと
 かつらをきいてすれも
 きんのおかれを
 さるおともそのやうあは
 やうはとこつたけり
 ぬすんていも
 あひんあはらうれ
 せうおちちりいと
 ありうとたせ
 きんをとねがひ
 侍がまよふと
 えいしあふと
 おひしめを
 とのりりれ

きんねまきふれと
 ひつてゆくおとこ
 うちいふやありいと

あやふか
 のりりれ

「こんなあはらうれ
 作者もあはらうれ
 いれもまきふれ
 うけあはらうれ
 あんすもいれ
 だ」



<二十一ウ>



<二十二オ>



<二十二ウ>



<二十三オ>



<二十三ウ>

鬼武作説話後序

夫然それ作者そは別怪物わかちまけもの之業のわざ也

よのつらおのろ面おもて公こう程りやう乃のち孫まごホほニ何なに里り

因よ大おほ嘆なげ千ちヤやシし坊ぼうあり視み能あた

海うみも智ち恵への海うみも海うみ也

いふ事ハうい替かへねとふ深ふひと
あさ浅あしきよ上う平へと下したるみ閑か人てが
ああんやんの書や肆や之み園こやらら
このさくサくの世や作者あがあき
さき先あなん一ん寸んとあらてる十五ご丁ていハ

黒猿くろざるくろく 幸出ひきだひせ乃の彩版さいばん稗史ばいし
 西にし平へい更さらもも昔むかしややうう子こ湯ゆ深ふか淵たに別べつ
いちぢうじん一いち船ふね能の行ゆははとと作さし者りやう画が工こう板ばんええ
いちぢうじん一いち同どう儂じゆう一いち色しきははるる己みづか
 ききののししららああ
 ううししららああ

来春出版目次

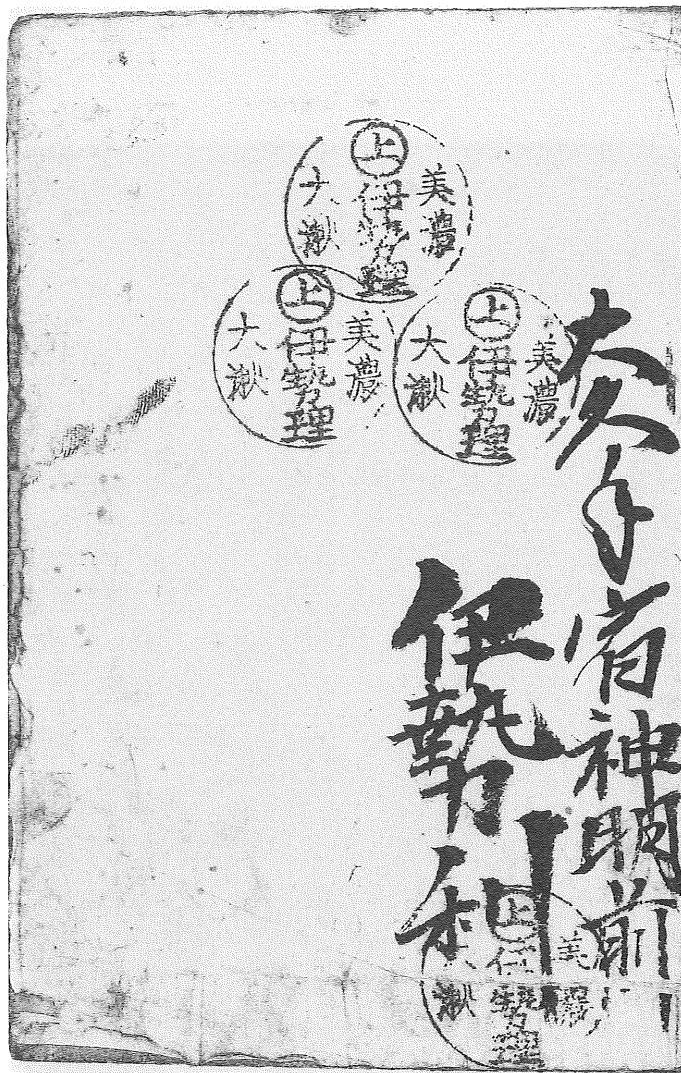
春代袋 靴釣形 袋文全冊 鬼武作

天保太平記 袋文全冊 同作

あつがらもわう〜舟中一紙作 争ひか
路々々々 板垣 了 了 了 了 了 了 了 了
なまきり

極え

『鬼武作説話』 解説・翻刻・影印

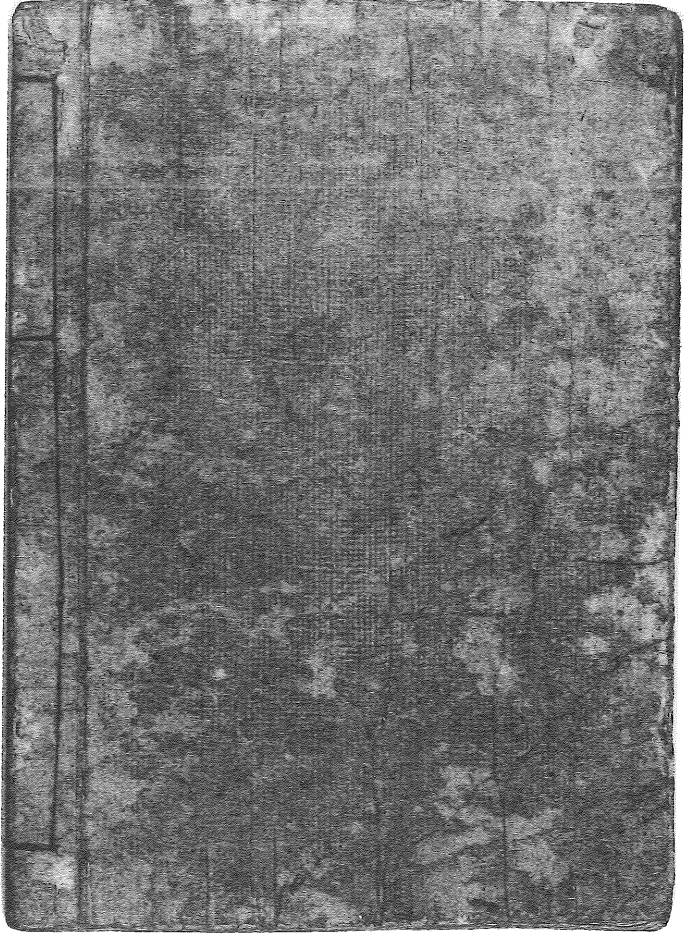


<裏表紙見返し>

『鬼武作談話』

おにたけものたたり
鬼武作談話』

解説・翻刻・影印



<裏表紙>